僕らは太陽の下で

りんご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕らは太陽の下で

【Ｎコード】
Ｎ９９４５Ａ

【作者名】
りんご

【あらすじ】
うまくいかない。そんなもどかしさを経験して成長していく、１７歳の少年たちのストーリー。

モラトリアム

多分、俺が思うに『少年時代』っていうのは挫折を味わうためにあるんだと思う。

なんでこんなことを言うのか、というと、それは俺自身、挫折を味わってきたからだ。だから、これは神様が俺に与えた試練だとか思って自分を激励してる。

そう、苦労した分だけ幸せになれると信じてるんだ。

相本鷹志、高校2年生。現在、挫折中。

ヘタレ

「鷹志！　マキちゃん来たぞ！」
放課後の玄関。靴箱から顔を覗かせて声を上げるのは、黒い短髪の少年、斎藤ノゾム。右耳にピアスをしている。彼らの世代では片仮名の名前が流行っているようで、同じ学年にはレイラやマキなどがいる。
「待った、ちょっと待った！　やっぱり駄目だ！」
後ろで待機していた茶髪の少年はそう言うなりノゾムに背を向けて走り出し、どこかへ行ってしまった。「あっ？　おい鷹志！」
逃げ出した彼が、相本鷹志である。背が高く運動神経が良い。整った顔立ちは大人びていて、一見完璧に見える。
だが、彼には優柔不断という欠点があった。今も、隣のクラスの稲村マキに告白するために玄関で待ち伏せしていたにも関わらず、逃げ出す始末。
「おいこら、待てヘタレ！」
ノゾムは大声で叫びながら、ヘタレこと鷹志を追いかけていった。

「おい！」
手を伸ばして鷹志の襟をぐっと掴む。全速力で走ってきたため、ノゾムの額には汗が浮かび、肩で息をしている。彼は乱れた制服を直しながら――と言っても元々だらしなく着くずしていたため、さほど変わらないのだが――ため息を一つついた。
「せっかくチャンスだったじゃんよ」
すると鷹志は勢いよく振り向き、絶対に無理だ、と少し大きな声を出した。
「マキちゃんモテるじゃん、絶対ごめんなさいって言われて終わるから！」

実年齢よりも大人に見える彼は、言葉を発すると途端に年相応――いや、それよりも下ではないかと思ってしまう。
そんな彼を見て、ノゾムは思わず呆れ顔になる。
「お前はもっと自信持てば？　鷹志も、十分モテるよ」
これはもちろんノゾムの本心だ。しかし鷹志は首を横に振る。
「ていうか話しかける勇気なんてない」
付き合いきれないわ、とノゾムはぼやく。もし自分が鷹志の容姿だったなら、間違いなく最大限に活用するだろう。そう思いながら、ポケットに手を突っ込んで来た道を引き返していった。

問題児

6月中旬。もうすっかり暑くなり、その陽射しは夏を思わせる。
暑い、という理由で鷹志とノゾムは授業を放棄し、校内で唯一クーラーのあるコンピュータ室に入り浸っていた。
「なぁーノゾム」
回転するイスの上で背もたれに身を委ね、ほぼ仰向け状態の鷹志がやる気のない声を上げる。
「んー？」
一方ノゾムは勝手にパソコンをいじり、この空間を満喫しているようだ。
「俺ってネガティブな子？」
鷹志はそのままの体勢で尋ねた。ノゾムもまた、パソコンの画面から目を離さずにこう答える。
「ネガティブじゃなくて、馬鹿」
鷹志は勢いよく、まさに“飛び起き”た。
「馬鹿じゃねー！」
「あっ馬鹿、でかい声出すなよ」
ノゾムが慌てて言ったが、遅かった。鷹志の声に気が付いた男性教員が隣の情報準備室からやって来て、2人は見つかってしまったのだ。
「逃げろ！」
鷹志が楽しそうに声を上げ、反対側のドアから廊下へ飛び出す。こんなことは日常茶飯事である。
彼らは教員たちに目を付けられている、いわゆる問題児というやつだ。ピアスも茶髪も校則違反、遅刻は当たり前、さらに気分の乗らない日は授業にすら出ない。しかし2人はそれで良かった。楽しければ、それで。

「あいつ足遅すぎ」
２人は逃げ切り、２階の廊下を歩いていた。あいつ、とは先ほどの教員のことである。４０過ぎの彼が、普段から走り回っている２人に敵うはずもないのだ。
何気なく体育館の前を通ると、ボールが弾む音が聞こえてきた。
互いに
「行くか」
などと声をかけることもなく、自然と足が向く。
ノゾムが、体育館のドアを両手で押し開けた。

日常

おぉ、と喉を鳴らすノゾム。鷹志が彼の肩越しに体育館の中を覗くと、女子がバスケの試合をしているところだった。

不意にノゾムが振り向く。その唇は、両端が上を向いていた。

「何にやにやしてんだ、気持ち悪いな」

鷹志は冷たくあしらう。だがノゾムはそんな彼の腕を引っ張り、自分の前へ押しやった。何だよ、と文句を言いながらも試合に目をやり、そこでノゾムの心中を理解した。

「あ……」

そこにいたのは紛れもなく、鷹志が想いを寄せるマキだった。声を張り上げてチームメートに指示を出しながら走り回るマキ。彼女はバスケ部のキャプテンなのだ。

鷹志が弱気になる理由は、これだ。自分は“問題児”と呼ばれる不良。マキは皆に信頼されるキャプテン。きっと向こうは自分みたいな人間は嫌いだろう、そう思ってしまうのだ。

「もう駄目だ、もう無理。もう、超好きすぎ」

とてもやる気が感じられない声で鷹志は嘆く。

「直接言う勇気がないなら、メールにすれば？」

「アド聞く勇気がない」

「同じクラスのヤツとか、誰かは知ってるだろ」

「ストーカーとか言われて嫌われそう」

何を言ってもマイナス思考。

「お前なぁ……もう勝手にしろよ」

腹を立てた様子のノゾムはあからさまに不機嫌そうな顔でそう言うと、さっさとその場を去ろうとした。

「いや、ちょっと待った！」

慌てて肩を掴んで引き止める鷹志。その瞬間、今まで聞こえていたドリブルの音や応援の声などがぴたりと止んだ。

「……あれ？」
２人は嫌な予感がして下を見る。案の定、マキのクラスの女子たちが全員、上を――自分たちの方を見ていた。
いや、それだけなら大した問題ではなかったのだが、女子たちに声が聞こえていたということは、だ。
「これ、まずいんじゃないの？」
苦笑する鷹志。ノゾムは大きなため息をつき、お前だろ、と呆れ顔。
「お前ら！　授業はどうした！」
鷹志のそれよりも数倍は大きいだろうと思われる声が飛んできた。声の主は、体育の教師だ。
「逃げるぞ！」
２人は体育館を飛び出した。毎日、よく飽きもせずに同じことを繰り返すものだ。いや、彼らからしてみれば、まともに授業を受けることの方が“飽きる”のだろう。
今、彼らは生き方を模索している。こうした中で、自分というものを確立していく。彼らなりの、『モラトリアム』。

ノゾムの告白

何度目の試みだろうか。鷹志はまた、靴箱の陰に身を隠してマキを待ち伏せていた。いい加減うんざりだ、とぼやきながらも付き合うノゾムが隣にいる。

突然、ノゾムが声を発することもなく鷹志の腕を掴んだ。

「はっ？　何、いきなり？」

鷹志が驚いて彼の顔を見ると、その唇の片端だけがわずかに上がっている。

「いや、今まで失敗してきた理由がわかったよ」

そう言ってノゾムは頷く。もちろん腕を掴んだまま。鷹志がなんだよと声を出すのと、ほぼ同時だった。

「ねぇ、そこ、どいてくれる？」

少し大きめの声が二人に降りかかってきた。聞き間違えるはずもない、マキの声である。鷹志はあまりの驚きに、声を上げることもできずに勢いよく顔を彼女の方へ向けた。

マキは、不機嫌そうに眉をひそめてそこに立っていた。

驚きを隠せないでいる鷹志の横で、ノゾムはにこやかに笑っている。そして、誰も予想しなかったことが起きたのだ。いや、ノゾムが“起こした”が正しい。

「マキちゃん、鷹志が付き合ってほしいんだって！」

「――は？」

マキが怪訝な顔をした。それから鷹志の方を見る。鷹志はと言うと、目を見開いて、ついでに口も開いてノゾムを見ていた。

そんな鷹志の気を知らないでか、ノゾムは鷹志を親指で指しながらマキに、

「付き合ってやってくれない？」

と言った。当然、鷹志はあからさまに“何言ってるんだ”という顔をして、しかし声は出さずにノゾムに顔を向ける。するとマキは、

鷹志の方を見ることもせずに呟くように小さな声でこう言った。

「……ごめん無理」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9945a/

僕らは太陽の下で

2011年1月8日20時01分発行